

令和4年度 陸前高田市文化遺産調査概要報告

ESD・SDGs センター 大西 浩明

1. 目的

2011年3月11日の東日本大震災及び大津波により、陸前高田市をはじめとする岩手・宮城・福島三県の太平洋岸は大きな被害を受けた。陸前高田市では市民の約1割にあたる人命が失われたほか、市の重要施設が被災し、多くのものを失ってしまった。しかし、幸いにも高台にあった寺の仏像は被災をまぬがれた。この仏像等の文化遺産を調査し、その価値を明確にすることが、陸前高田市や周辺市町村の市民を元気づけることになると考え、2012年度より8回にわたって本調査団を派遣してきた。この間、文化財調査やそれをもとにした教材作成を進めるとともに、被災地の復興状況を視察し、被災された方からの聞き取りやボランティア活動などを通して、ESDの理念に基づいた防災教育に資する教材作成を行うなど、大きな成果を得てきた。しかし、2020年度より2年間はコロナ禍によって中止を余儀なくされた。本年度は、これまでの成果をさらに深めるため、本調査団を組織し実施する。

2. 実施日 令和4年9月7日（水）～10日（土）

3. 参加者 学部生：広野祥子、川田大登、木幡美幸

大学院生：笠置千尋、辰上亜弥子

教職大学院生：井阪愛子

大学教員：山岸公基、加藤久雄、大西浩明

4. 宿泊地 民宿吉田（陸前高田市米崎町松峰110-5）

5. 日程・活動

	文化遺産班	ESD 防災班
7 日	・多賀城跡、多賀城碑見学 ・多賀城廃寺跡見学 ・普門寺打合せ	・東日本大震災津波伝承館見学 【陸前高田市気仙町土手影180】 ・一本松、気仙中学校跡等周辺の震災遺構見学
	・陸前高田市教育委員会表敬訪問 【陸前高田市高田町字下和野100】	
8 日	・普門寺調査 【陸前高田市米崎町地竹沢181】	・市立博物館副主幹 佐藤由也氏より講話 （前市民協働部長） 「陸前高田市の復興状況と地域コミュニティづくりについて」 @陸前高田市立博物館 【陸前高田市高田町字並杉300番地1】
		・市立図書館長 菅野義則氏より講話 （元小学校長） 「防災教育と復興教育について」 @陸前高田市立図書館 【陸前高田市高田町字馬場前89-1】

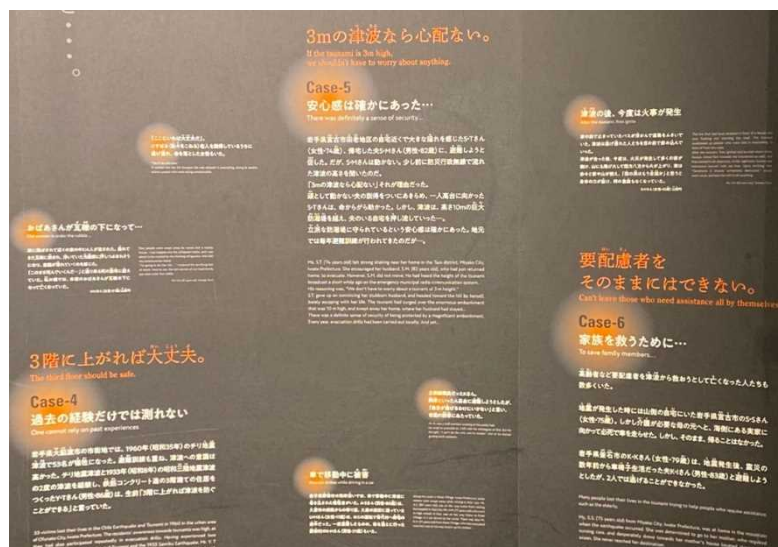
	文化遺産班	ESD 防災班
9 日	・ 普門寺調査 【陸前高田市米崎町地竹沢 181】	・ 仮設博物館の見学・講話 「被災資料の復元状況などについて」 市立博物館長 松坂泰盛氏 @陸前高田市仮設博物館 【陸前高田市矢作町二田野】
	・ 東日本大震災津波伝承館見学 その他、周辺の震災遺構見学 ・ 常膳寺見学	・ 旧吉田家住宅主屋復旧状況見学 【陸前高田市気仙町】 教育委員会副主幹 佐々木敦美氏 文化財係学芸員 曳地隆元氏 ・ 市内震災遺構（津波石碑）見学等
10 日	・ 藤里毘沙門堂見学 【奥州市江刺区藤里字智福 39】	
	・ 豊田館跡想定地見学 【奥州市江刺岩谷堂下苗代字餅田】	
	・ 岩手県立平泉世界遺産ガイダンスセンター見学 【平泉町平泉字伽羅楽 108-1】	
	・ 中尊寺見学 【平泉町平泉衣関 202】	
	・ 毛越寺見学【平泉町平泉字大沢 58】	

◎ESD 防災班の今回の調査目的

ESD 防災班の学生（川田、木幡）はいずれも中学校教員を目指しており、教職大学院生（井阪）は現職の中学校教員であることから、現在の中学校における防災・減災教育のあり方を批判的に見つけ、真に自分ごととなり得る防災・減災教育はどうあるべきか、どのような資質・能力を生徒の身につけておかなければならないのかを、震災時または震災後の被災地の取組に学び、奈良の地から提案しようとするものである。

・東日本大震災津波伝承館（いわて TSUNAMI メモリアル）の見学から

当施設は、「歴史をひもとく」「事実を知る」「教訓を学ぶ」「復興を共に進める」という4つのゾーンからなっており、被災した実際の物、被災現場をとらえた写真、被災者の声などを展示しているだけでなく、津波のときの人々の行動をひもとくことで命を守るための教訓を共有しようとしている。特に、



人々がそのときどのように考え、どんな行動をとったのかというところに全員が大きな興味をもった。

「3 mなら大丈夫」、「3 階に上がれば大丈夫」といった、それまでの自分の経験から「正常化のバイアス」が働いたであろう人々の言葉が数多くあり、そうならないためにはどのような教育内容が必要なのかを考えさせられる展示が多くあった。

当時、人々はどう思ったのか？

・津波伝承館周辺の震災遺構の見学



道の駅 タピック 45



気仙中学校跡



ユースホステルと
奇跡の一本松

いずれも津波の威力のすさまじさを感じざるを得ない。特に、津波の高さには圧倒される。「道の駅タピック45」の最上部、気仙中学校の屋上部分まで津波が来たということを、実際に目の当たりにして、そのすごさに改めて恐怖を感じてしまう。

この周辺を歩くと、新たに高さ 12.5mの防潮堤が完成し、気仙川にも大きな水門が完成していた。かさ上げも終わり、町は復興しつつある段階だが、いかにハード面は整備されても、大切なのは人々がそのときにどのように行動するのかというところの一点である。その意味からも、今回の ESD 防災班が取り組もうとしている「自分ごとになる防災・減災教育」というテーマは、どこの地域においても大切な視点であり、汎用性のあるものである。

・講話「陸前高田市の復興状況と地域コミュニティづくりについて」から

前市民協働部長でもある佐藤由也氏より、陸前高田市における震災による被害状況や、その後の復興の経過等についてお話をいただいた。震災の検証作業で得られた反省と教訓として、次の6点を挙げておられた。

- 1) 避難が何より重要
- 2) 避難所に逃げたら終わりではない
- 3) 公的な役割を持つ者の安全の確保
- 4) 災害に強い安全なまちづくり
- 5) 社会的弱者も安全に生活できる社会の実現
- 6) 防災の心得

この中で、6) 防災の心得として、

ア 災害への備え

- ・自然災害を完全に防ぐことは不可能
- ・災害に備えることで被害を軽減することは可能

イ 防災教育の充実

- ・津波の恐ろしさや避難文化の伝承



佐藤由也氏の講話

・住宅再建に伴う自主防災組織の再編・強化

とお話しされていたが、「避難文化の伝承」ということについては、津波だけでなくどこの地域においても地震や水害、土砂災害などの危険性はある、歴史をひもとくと何かしらの伝承が残っていたりするものであり、示唆に富む内容であった。

また、講話後、11月に開館予定の市立博物館の展示について説明を聞いた。展示の一つに、「津波を伝える」コーナーがあり、明治三陸津波、昭和三陸津波、チリ地震津波のそれぞれの教訓からこの地の人々が津波に対してどのような認識を持っていたのかがよく理解できた。しかし、それでも今回の津波で大きな被害を出してしまったという事実から、いかに避難文化の継承が大切か、実践的かつ継続的な防災教育が必要かを感じた。

・講話「防災教育と復興教育について」から



菅野義則氏の講話

高田小学校長でもあった市立図書館長の菅野義則氏より、津波襲来時の学校の様子や震災後の学校の様子などについてお話をいただいた。震災当時、教育委員会に籍を置かれていて、地震があったときに市役所から外に出て、学校の様子を見るため下に降りて行ったところ津波が来ていることに気づき、慌てて引き返したというお話をされた。「人間というのは、分かっているにもかかわらず正しい行動がとれない」と、自責の念とともに話された言葉が印象的であった。また、その後の避難の状況について市内の3校を例にお話いただいた。

さらに、陸前高田市における防災教育について、市教育委員会が作成した「明日のために」と題した防災副読本をもとに説明していただいた。また、復興教育としての取組の中で、子どもの心のケアについてのお話があった。要サポートの児童生徒の割合が、沿岸部の児童生徒の方が内陸部の児童生徒より多いのは、震災における影響がまだまだ尾を引いていることがうかがわれる。

・陸前高田市教育委員会表敬訪問



市議会開会中にも関わらず、山田市雄教育長から調査団への激励の言葉をいただくとともに、教育長自ら9階展望ルームからの市内の説明をしていただいた。

・陸前高田市立仮設博物館の見学から

被災したのは人や建物だけではなく、文化財も同じである。震災時、市立博物館などに展示・収納されていたもののうち、約46万点の被災資料の安定化処理が、旧生出小学校に設置された仮設博物館で行われている。救出された資料は、いずれも陸前高田市の自然・歴史・文化を伝える貴重な資料ばかりで、玄関に掲げられている「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」というスローガンそのまま、職員の方々の懸命な作業によって一つ一つの資料を甦らせようとされていた。



玄関にかかっているスローガン



修復作業の様子の見学

博物館長の松坂泰盛氏より作業の概略を説明していただいた後、実際の作業現場を見学させていただいた。例えば、古文書ならばいったん紐解いて一枚一枚の汚れを取り、油脂とり、漂白、洗浄、乾燥を何度も重ねて元の状態に戻すという大変な作業である。

処理の終わったものから新博物館への運び出しも始まっていたが、相当な数なのですべては移転されないようである。全体の70%あまりの修復が終わったが、残っているものは大きいものや修復作業の難しいものばかりだそうで、これからまだ何年かかるだろうということであった。

・旧吉田家住宅主屋復旧状況見学から

吉田家住宅は、江戸時代に仙台藩領気仙郡（現在の陸前高田市、住田町、大船渡市、釜石市唐丹）の24箇村を治めていた大肝入吉田家の住宅である。後に「大庄屋」と呼ばれ、主屋は東側の表門側に座敷3室を設け、北側には広い土間部の御臺所があり、それらの間を広い居間部でつないだ大規模な茅葺の建物であった。津波によって全壊し、座敷廻りは屋敷の西側に約100メートル、茅葺屋根は諏訪神社を回った旧気仙小学校側に約300メートル流出した。土蔵や味噌蔵などは屋敷の西側に流出し、流された跡地には近在の建物の部材が散在していた。

復旧にあたっては主屋を復旧することを第一とし、回収された残存部材をできる限り活用する方針で、その数は全体の6割程度の1000本を超えている。しかし、実際に使おうと思えば、使用箇所の特定、洗浄、補強なども必要であり、何よりもどのように組み合わせるのか、そのためにどう加工すればよいかという、建築当初との技術の壁もある。見学させていただいたときは、ちょうど屋根の茅葺き作業をされていたが、多くの茅を調達するだけでも大変なようで、作業自体も地道に進めていかなければならない時間のかかる作業である。



主屋復旧状況について説明を聞く



復旧作業中の主屋での説明

午前中に見学した仮設博物館にある、「文化財の残らない復興は本当の復興ではない」というスローガンを思い出した。地域に残ってきた大切な文化財を「災害ごとき」で失うことは、大きな「心の損失」である。作業にあたっておられる職人さんや作業員の方々の必死な姿に頭の下がる思いであった。

・津波石碑の見学から



津浪記念碑
 明治廿九年六月十五
 日午後八時襲来
 死亡者全村五五二名
 流失戸数同一五七戸

一、大地震の後には
 津浪が来るよ
 一、地震があつたら
 高所へ集まれ
 一、津浪と聞いたら
 石巻市石井敬三郎刻

昭和八年三月三日午
 前三時襲来
 死亡者全村四五名
 流失戸数同一二五戸

一、悠捨て逃げる
 一、低いところに住
 家を建てるな



低いところに住家を建てるな



それ津浪 機敏に高所へ